

研究ノート

## 1950年代、石垣綾子による女性の結婚と労働への提言

村 上 潔\*

### はじめに

本稿では、評論家石垣綾子<sup>1</sup>の1950年代の論文・著作から、当時の日本における女性の結婚と労働に関する問題への認識と、それへの提言が見られる箇所を取り出し、確認する作業を行なうものである。

石垣綾子の提言に注目する理由は、石垣が1955年2月に発表した論文「主婦という第二職業論」(石垣 [1955a])を重要視するゆえである。いわゆる 主婦論争 を引き起こす嚆矢となったこの論文は、主婦や主婦予備軍にあたる女性の意識向上を強く説き、戦後日本における 女の生きかた論 の土台をなす意味を持つ。

女は主婦になるという第二の職業が、いつでも頭のなかにあるから、第一の職業である職場から逃げごしになっている。結婚して、安易な家庭生活を求め、夫に頼って生きるという態度を、女は断念しない以上、職業婦人としてたってゆく資格はない。……結婚しても働かなければならない社会状態になっているのであるが、女は長い間の習性から、男性にたよって生きるという考えを捨てきっていない。(石垣 [1955a:4])

結婚すること(=「主婦になる」こと)と、職業労働に従事して生きてゆくこととの関係を、真の女性解放へと向かう理念から、また現実に進展する消費社会における主婦の心理状況の文脈から、大段的に、そしてセンセーショナルに問うた論文である。このテーマに関する当時最先端の認識という意味での指標に、これを置きたい。

その画期となる1955年2月をはさむ2年間に書かれた石垣の論文・著作からは、「主婦という第二職業論」に集約された思考の諸断面へと同心円状につながってゆく、いくつかの問題意識を抽出することができる。それらを検討することにより、より広い石垣の問題意識や思考の特質が浮かび上がり、「主婦という第二職業論」という単体の論文を独立して捉えるよりも有効な分析の可能性が広がってゆくはずである。

以上の問題意識から、本稿では「主婦という第二職業論」そのものは扱わず、関連論文を確認する作業を進めてゆくことで、石垣の認識・提言に関する概論的考察を行なう。

### 1 結婚難について

石垣は1954年の時点で、「職場にある女の、結婚難」(石垣 [1954:177])を問題にしている。

男なら誰でもより好まない、というなら、結婚もたやすいだろうが、働く近代女性ともなれば、注文も難しくなるから、おいそれと、理想の夫はみつからない。 / それかといつて、独身で一生を過すほど、職場にある女の将来は、あかるいものではない。入社して、五、六年もたてば、そろそろ、邪魔もの扱いにされる。いつたい、あの女は、いつまで結婚もせずに、ぐずぐずしている気なんだろう、と男の同僚は、変な目をじろじろと、なげかける。こうした心の焦りに加えて、女としての生理的な悩みが、おも石のようにのしかかってくる。この不安を、いつたい誰が、わかってくれるというのだ? (石垣 [1954:177])

以上が石垣の総体的な提起である。これをもとに、問題となるいわゆる“三十娘”と呼ばれる年齢層と、それに間近い20代おわりの働く女性たちの「不安」に関する石垣の認識を順に見ていこう。

まず、石垣の友人で経済的に成功している一流デザイナーのアメリカ人女性の事例が挙げられる。

---

キーワード：1950年代、女性、結婚、女性労働、石垣綾子

\* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2004年度入学 公共領域

わたくしの友は同じ会社に働く同僚とか、一介のサラリーマン級ならば、よるこんで夫の座にすわつてくれる男を得たであります。だが、それでは高給をとる女の方が、損をします。……たとえ結婚しても、彼女は職業をやめはしないのですが、自分よりも更に生活力のある男でなければ気に入りません。パリーやローマの世界の富豪のたまり場へ、高い旅費を払つてゆくのは、ひよつとしたチャンスが、出現するかもしれないからでした。かの女の身辺をおよく、ふつうの男性は勘定には入りません。(石垣 [1955b:24])

そこに彼女の悩みがありました。高給をとつて、毛皮のコートを着て、自家用車をのり廻し、成功した職業人とはなりましたが、心のそこは孤独のさびしさに冷めたい空虚な穴があいています。生きる人生の意義とよるこびを感じられない悲哀がありません。資本主義の生んだ、女の悲劇であるかもしれません。(石垣 [1955b:25])

こうした層の行動を、石垣は「男狩り」<sup>2</sup>と呼び、さらに「同じ男狩りにしても、えものの目標が高いから、たやすく手に入らない」(石垣 [1954:179]) ことを特徴として挙げる。

そして石垣はアメリカの女性と日本の女性を比較し、注意を促す。上記のような孤独の寂しさ、結婚難の悩みをもっていることはどちらも変わらないが、日本の“三十娘”の場合、それが以下のような方向に向かうという。

結婚したいと思う理想の男性は、みあたらないし、職業の将来性はないし、胸にもやもやするうつぶんは、三角関係を肯定するような心理をうむ。生理的にも危機にあるかの女たちは、生活の息ぬきをしたい中年の男と、要求が一致する。(石垣 [1954:180])

それが、「零号の恋」と呼ばれる、妻子ある中年男性との職場恋愛<sup>3</sup>となる。この恋愛形態に至る要因は次章で見ることになるが、結論として石垣はこの恋愛形態を、資本主義社会機構における、また女性の恋愛観の発達過程における「過渡期の現象」(石垣 [1954:181]) と位置づけ、次第に解消されてゆくものとすると同時に、つまらない男を相手にせず、もっと自信をもって真剣に男狩りをやるべきだ、と述べる<sup>4</sup>。

これからは働く女性の叡智と、精力を求め、仕事の喜びも悲しみも、共にわけあう協力者を、さがしあてることだ。結婚しても、夫婦共かせぎで、人生と家庭を築きあげてゆくことだ。(石垣 [1954:181])

たとえよい結婚ができたとしても、あくまで「夫婦共かせぎ」が理想の形態となる。そこには、日本の一般家庭の経済的な条件と、主婦の座に安穩としていることには満足できなくなる、という「主婦という第二職業論」でも述べられている女性の心理の問題と、両面の意味がある。

一方、独身生活を楽しむアメリカ女性の姿を念頭に置き、以下のようにも述べる。

愛する人に出逢わなければ、悠然と、ひとり住まいを楽しめばいい。結婚の可能性はいつまでもあつて、楽しみです。独身であれば、手足をひつばる家庭の重荷から解きはなれます。職業に全身を打ちこみ能率をあげてゆくことができるのは、ひとり住まいの特典であります。(石垣 [1955b:102])

反面、職業婦人が現実には直面する厳しいハンディキャップに立ち向かう意欲と精力がなく、「途中で逃げ出して、結婚のみちをえらぶとしても、それは無給の細君業であるにすぎない。せまい家の中に押しこめられた細君業は、職場の生活よりも、たいくつで、やりきれなくなるであろう」(石垣 [1954:180]) と述べ、また結婚に成功したとしても、「主婦として台所の板の間にすわることはできる。だが、そこにすわっていれば、足が痛くなる」(石垣 [1954:181]) として、注意を促している。この指摘は「主婦という第二職業論」で述べられている内容と合致する。

この問題における石垣の思考展開の特徴としては、アメリカのパチェラー・ガールを念頭においてスタートし、そこにライフスタイルの異なる日本女性を取り巻く現実を対比させつつも、問題設定の枠組みとしてはそこにオーヴァラップさせている、という点が指摘できるだろう。

## 2 原因追求と提言

次に、石垣が“三十娘”の結婚難の原因として挙げている諸要素を列挙した上で、それをふまえて石垣がいかなる提言を行なっているかを確認する。

### 2.1 原因

まずは単純に、人口における男女比率の不均衡がある<sup>5</sup>。

それにしても、“三十娘”と呼ばれる年齢層の女性が、結婚難に遭遇している一つの大きな原因は、太平洋戦争のあおりを受けて、適齢期男性の数が減っていることです。…… / 人口の上から見て、女にとって結婚は狭き門となり、“三十娘”の問題が戦後に現われた新しい現象として登場したのは当然でした。(石垣 [1955c:130])

次にくるものは、男性の経済力の問題である。

結婚難をもたらす社会的な原因にはいろいろあります。資本主義社会では、第一に経済的な原因が大きな障害となります。結婚は女にとって終生就職にも似たもので、生活の保障を夫に求めます。結婚は決して食べさせてもらうがためにするのではなく、愛情をもとにした男と女の結びつきであつて、それを心から望んでいながら、夫の経済力を除外視することができない社会の仕組であります。(石垣 [1955b:209])

現在の日本では、男はある程度の経済力がなければ、結婚する資格はないとされています。……男は夫として妻を養い、やがて生れる子供たちを養育する経済力を期待されているのです。その期待を果すことができなければ、男は結婚できません。経済的な事情によって、強いられた独身者となります。(石垣 [1955c:130])

失業や低賃金、その他の経済事情で、男性の中に強いられた独身者がふえてゆきます。男の人口が少い上に、男の独身者が存在すれば、女の結婚難はますます増加すると云わなければなりません。男のうちには、自ら選んで独身で通す人もあります。(石垣 [1955c:130-131])

この二点を合わせて石垣は、「こうしてみると、“三十娘”が結婚できないということは、彼女たち自身の落度でもなく、欠陥でもなく、社会的な条件によって、結婚をはばまれてにすぎません」と指摘する。「女の人生は結婚と家庭にあると説いていながら、社会はすべての女に妻となる機会をあたえていません」(石垣 [1955c:131]) という事実を再確認し、第一の問題は「社会の仕組み」/「社会的な条件」であることを前面に押し出している。

また、男性の経済力の問題だけでなく、以下の面も同時に強調していることは注目すべきである。

女の結婚難をもたらす根本原因は、人口の不均衡と経済事情であることをのべましたが、女も男と同様に、経済的な理由で独身を強いられる場合もあります。“三十娘”といわれる人たちの中には、一家の生計をたすけるために働きつづけて、婚期を逸した場合がかなりあるでしょう。うちの娘に結婚されては生活が困るといって、結婚を延期させておきながら、“三十娘”となった彼女を、こんどは「一人前」ではないと、身内の者までが軽蔑の対象にします。(石垣 [1955c:131-132])

この問題から、「多くの女性が、結婚できない状態におかれているのに、女は結婚し家庭があればそれだけで十分だとして、女の経済的な独立と職場での進出に反対することは、現実を無視しているわけです」(石垣 [1955c:132]) という強い指摘を行なっている。

以上をまとめると、人口比、男女双方にのしかかる経済的・社会的条件のすべてが相まって、“三十娘”の結婚難が説明できる、というのが石垣の認識である。

### 2.2 提言

石垣は上に挙げた認識に基づき、次のような問いと答えを自ら用意している。

では、実際問題として、“三十娘”はどうすればよいのか、彼女たちの結婚をはばんでいる根本の原因は、社会制度の欠陥にあるので、その害悪をとり去ることが、究極の目的になりますが、現在、この日本の社会で、どのようにしたら、女のひとり住いを、楽しくゆたかにできるであろうか、を考えてみましょう。 / 私は結婚期というものに捉われてはならないと思います。

また現在の社会では、それをきめることは不可能でありましょう。(石垣 [1955c:132])

また、そうした女性が働いてゆく際の意識を連関させて、以下のようにも言う。

職場でねばり強く、自分の能力を主張し、実行する気力と意気と熱情をもっている新しいタイプがふえています。結婚に対しても、同じねばり強さと、真剣さで、あせらずに、どつしりと取りくんでほしいものです。(石垣 [1955b:79])

女は社会の一員として人間らしく生きようとする、妻としての資格を失うのです。……女として、私は、この両方を融合させることのできる男性、つまり女に対する偏見を脱皮した男性を、根気よく探しあてることに、幸福が約束されていると思うのです。もし、女を人間として、理解する男性にめぐり逢わなかつたなら、結婚しなくとも、仕事に生きぬく、女として、張りきつた人生を送るようになりたいものです。(石垣 [1955b:79-80])

男と女をわけへだてている社会の偏見を突き破ってゆくとき、結婚の可能性をますことができます。その過程を通してお互いに愛する人にめぐり逢えば、それは祝福されてよいことでもあります。また、めぐり逢わなければ、ひとり住いの特典を十分に生かす生活を送ることです。あらゆる自縛から解放されて、自分のおかれた境遇を、有利に導くことが、幸福な人生をくらす鍵でありましょう。その場合、大切なことは女が生活能力を、できるだけ身につけてゆくことです。(石垣 [1955c:133])

今、職場にある若い女性は、たとえ結婚するにしても、またしないにしても、自分の技術をもつて、一生を生きてゆかれる途をちゃんと身につけて下さい。(石垣 [1955b:235])

まとめると、(1) 結婚期にとらわれず、(2) 職場で真剣に仕事に取り組み、(3) 経済的に自立できる生活能力を身につけて、(4) 女への偏見のない理想の男性を根気よく探しあてる、ということになる。

これは、最初に見た「男狩り」とほぼ同じことを言っているのだが、石垣は「男狩り」という言葉を、当初の前提としてアメリカ型の仕事で成功し経済的に余裕のある女性をイメージして使っているので、ここでの認識は本来それとは差異化されるべきものである。ただ問題なのは、それぞれ違う立場の者を念頭においてスタートした思考の流れが、結果として合流するところにある。その点が石垣の認識の特徴として、注意すべき点である。

ここまでの流れを【図1】にまとめてみたので、参照されたい。

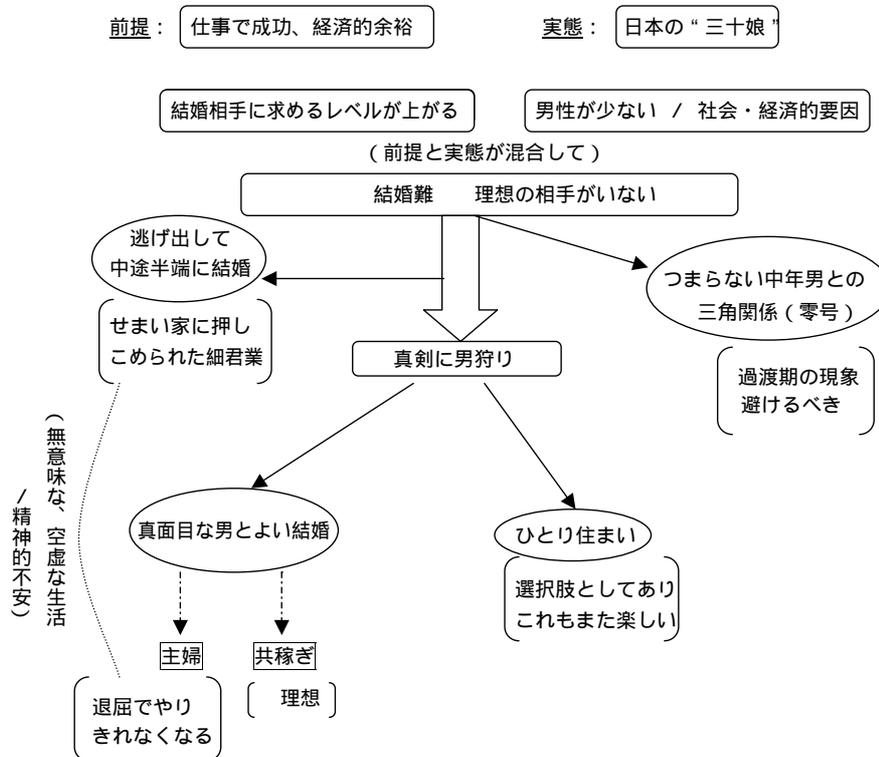


図1 “三十娘”の身のふりかた

## 2.3 零号問題に関して

次に、1章で見た「零号の恋」問題について確認する。

日本の社会では、特定の少数の女性をのぞいて、一般には女の職場は限界があって、年を重ねるとともに職場で肩<sup>(ママ)</sup>味の狭い思いをさせられます。“三十娘”は職場から閉め出される不安や人間性をうばわれた機械のような毎日に、ともすると絶望的になり勝ちです。(石垣 [1955c:133])

三十娘の問題は、資本主義の社会で、人間らしい生きかたをする、ゆとりをあたえないことにも一つの原因があります。……よい配偶者を得て、結婚する可能性は、少なくなつてきますが、では、職場で十分に、自分の能力を、精力を注ぎこむことのできる条件をあたえられるかという、それも否定される方が多いのです。女性の職場は広くなつたとは云え、女であるがためのハンディキャップがあって、収入は男性よりも低いのが、ふつうです。働く者は、いくら働いても、将来にたいした希望をあたえられなくなつた資本主義の社会で、三十娘は、とくに、それを敏感に感じます。(石垣 [1955b:211-212])

石垣は、先に見たように、こうした心理が引き金となって女性が職場での三角関係 = 零号の恋に向かう、とする<sup>6</sup>。

資本主義の矛盾した社会機構の中で経済的な独立を得た女性は性のなやみや、孤独の淋しさを、結婚難のこの時代に、結婚によらない方法で、愛情の対象を求め、性の処理をする、という傾向を生んだのでありましょう。零号になつている職業婦人を調査してみると、給料が少ないために、生活の楽しみを味わう経済的な余裕が全くなく、愛する男に週末の旅行に連れて行つてもらつたり、また、コートを買つてもらつたりするというケースもあります。純粋な愛情だけの問題ではなく、生活の補助や、生活の息ぬきとして、男から、何かの形で、経済的の恩恵を得ている場合もあります。(石垣 [1955b:213])

働く女性のサラリーが少なく、職場の安定がないと、ひとりの独立した人間として生きてゆくことが、できませんから、経済と愛情のからみあった零号が発生します。これを解決するには働く女性の賃金をあげ、職場の安定をはかることが大切であり、急務となります。(石垣 [1955b:215])

女性が零号の恋に向かうのは、(1) 職場の安定がない→(2) 経済的・精神的な余裕がもてない→(3) 男性に両面を頼る、という構図にあるとしている。ただ石垣は、先に見たように、零号の女性を基本的には「経済的には自立した女性」と規定しているので、規定条件としてやや矛盾・ブレが見られる。これも、理念的な前提と現実の実態の双方を混合させた認識と見ることができるだろう。実態の面では、たとえかたちの上では「経済的に独立」しているように見えても、経済的・精神的に余裕のない、危うい状況にある女性たちがほとんどだ、という認識があることがわかる。おそらくそこから石垣は、先に見たように女性たちに生活能力を身につけることを強く訴えるのと同時に、それだけではどうにもならない現在の状況を変革すること 具体的には職場の安定をはかることの必要性を指摘している。

## 3 展望

先に見たいいくつかの提言とは別に、石垣がもっている、女性の社会機構の中での役割についての展望を挙げてみる。

まず、“三十娘”の問題と、現状の社会機構の問題を、噛み合わせてゆく過程から見る。

自分の職業に生き甲斐を見出している人ならば、仕事に真剣に打ちこむことによって、ひとり住いの欠乏感を補うこともできます。一つの仕事に魂を打ちこむことができれば、欠乏感を補うという消極的なものではなく、積極的なよこびが、その仕事の中から限りなく湧き出てくるでしょう。ノしかしながら、日本の今日の社会は、職業に生きるひとりの女が自分の精神的な、また肉体的なエネルギーを、力一杯に注いで、生き甲斐のある仕事をなかなかあたえてくれません。こうした社会条件のもとで、“三十娘”は動揺します。(石垣 [1955c:134])

強いられた独身は、彼女たちの至らなさでもなく、心待ちがいでもないことがわかれば、その次には、こんなことになった現代の社会組織を批判する段階に到達します。(石垣 [1955c:134])

“三十娘”は結婚という個人の愛情の問題が、社会の仕組みのからくりの中で、どんなに阻止されているか、身をもって知る立場におかれています。(石垣 [1955c:134])

こうして「これまでの習慣や、法律や、経済機構」を変えてゆく方向で、「女じしんが、こうした屈辱的な地位から、解放されるように努力」(石垣 [1955c:134]) してゆく必要があることを主張する。

次に、資本主義社会機構の問題について見る。石垣は「主婦という第二職業論」において、「資本主義社会の経済機構は、だんだんにゆき詰っているから、独身を強いられる女はふえてきたし、また、結婚したとしても、女はこれまでのように、妻として家庭の中で安閑と暮すわけにはいなくなってきた」(石垣 [1955a:4]) と指摘している。「三十娘」に関する言及でも、資本主義社会機構の問題は触れられていた。以下は、より「主婦という第二職業論」全体の論旨によった内容を述べている箇所である。

利潤を追いかける資本主義社会は、女を家庭から、社会の生産の場に押し出しているのですが、そのとき女が直面する職場と家庭生活との矛盾を、社会的に解決しようとはしません。家庭と職場の二重の任務をおう女性と、その彼女たちと一緒にその苦痛を減らすために、協力してくれる庶民階級の男性とが、力をあわせて、強い要求を出した時に、社会的な設備や社会保障がある程度まで、実現する可能性があります。根本的な解決は、人間の労働を搾取して一部の者が富と権力を所有するこの社会の仕組みを、かえてゆくことにあります。(石垣 [1955b:109])

資本主義は、女を家庭から社会へ押し出しました。押し出された女は、人間的に目ざめました。男のかたわらに立ち、仲間として仕事をわけあつています。女も、独立した人間として家庭に入つても職業をもちたいと望んでいます。ところが、資本主義の社会は、女を家庭から放り出したけれども、女の肩に重くのしかかっている伝統的な女の任務を、社会化して、女の能力を、思いきりのばさせる途を、ひらこうとはしません。女という名のためにいつまでも職場の下積みにされて、一人前にとり扱われません。そして彼女は家庭にかえれば、主婦という家事労働を遂行しなければなりません。家庭をもちながら社会に出て働く女は、二重の搾取を受けて苦しみます。そのために家庭が破壊されるおそれすらあります。女が職場も、家庭も両立させたいと願うとき、今の社会では、個人的に解決されない制約に、つきあたります。利潤を追う資本主義社会は矛盾と不合理にみちみちています。この不合理の犠牲とされないために、女は、社会組織の矛盾をはつきり知つておく必要があります。その自覚の上に立つて、男と女が、平等な立場から手を取りあつて、そのカベをのりこえて社会の改造にあたつてゆくとき、自由な男と自由な女が、生れてきます。職場にある女性は、その人間的解放という歴史的な役割を、果す人たちではないでしょうか。(石垣 [1955b:94-95])

石垣の「資本主義社会」に対するアンビヴァレントなスタンスが如実に窺える。石垣が問題とすることが、すべて「資本主義社会の矛盾と不合理」によって説明できるかどうか、ということも含めて、石垣の「資本主義社会」認識についての詳しい考察は、別の機会に譲りたい。ここでは、結論としては、社会変革のため、自らの立場に関する女性の自覚を促し、理解ある男性と協力して進んでゆく姿を理想としているが、その主体となるのは「職場にある女性」である。なかでも特に、「三十娘」(の立場にある者たち)は、結婚の問題において「社会の仕組みのからくりの中で、どんなに阻止されているか、身をもって知る立場におかれて」いるのであるから、石垣としては、彼女たちの連帯と働きかけを強く望んでいたと思われる<sup>7</sup>。

ここで指摘できるのは、石垣の思考においては、「主婦」の労働の問題と、未婚の「三十娘」の労働の問題は、「資本主義社会機構の矛盾」のもとに同質の問題として認識されていることである。

## まとめにかえて

以上に見てきた石垣の思考のエッセンスを、【表1】に簡単にまとめた。

一つの特徴として、「資本主義社会機構の矛盾」や女性に厳しい職場環境といった「現状」を厳しく問題化し、変革の必要性を訴えつつも、まずはそうした状況にあることを前提として現実の対応を考える、ということがある。その意味では石垣は、改良主義的なスタンスをとっていると言える。

次に、石垣にとって、女性の「結婚」の問題と「労働」の問題は、不可分の関係にある。現状では、双方の問題が相互作用的に、女性に不利な状況を生み出していることを主張する。しかし社会総体の流れとして、確実に女性の生きかたは「自由」の方向に前進してきており、社会の制度や慣習さえ改められれば、理想の状態に一気に近づけられる状態にある。それを実現するには、強固な意欲と精力をもった女性たちが、各々の職場で勇気をもって突き進むこと、とする。またそうした女性たちの連帯も大きな力になるとする。結婚難の問題でも、最終的な帰結としては女性の「労働」の質の追求に、心地よく生きてゆくための突破口を見出している。

「主婦という第二職業論」は、主に結婚後の女性(=主婦)の労働のありかたについて書かれたものであったが、以上の内容をふまれば、それは石垣の女性の生きかたと社会のありかたをめぐる思考全体のうちの一部として、改めて位置づけられるだろう。理想の「結婚」のためにはまず職場での質のよい「労働」を、という論旨と同じ流

表1 石垣の思考の整理

	労働	結婚
問題の所在	資本主義社会機構の矛盾	家族制度の因習 / 女の甘えた精神
将来的理想 (社会変革)	女性が働く職場条件の整備	共稼ぎへの意識向上
現状で女性がすべきこと	職業に生き甲斐をもち、 仕事に真剣に打ちこむ	生活力を身につけ、一人でも 根気よく / 正しい男狩り
打開する手だて	困難な状況を切り開き突き進んでゆく女性の強い意欲と精力	

れで、新しい「主婦」の理想像には職場での質のよい「労働」が望まれるのである。本稿の展開に立ち戻ってみても、「結婚する / しない (できない)」、言い換えれば「主婦になる / ならない (なれない)」の境界をまたぎ共通するものとして、「労働」がある。石垣においては「労働」 - 「自立」が、女性の (さらにいえば男女の) 生きてゆく上での第一義なのである。この点は改めて確認しておくべきことだろう<sup>8</sup>。

また2.3で指摘したが、「経済的に余裕がある」女性と「経済的に独立した」女性の差異を認識しつつもそれを混合して一つの流れに集約していったりするような面が見受けられる。階層的問題は常に意識されつつ、常に留保される。女性総体の内在的差異はいったん棚上げにしたかたちで、全体的前進 / 漸進に気を尽しているのが窺える。そして、さまざまな面で「女性が地道に努力してもどうにもならない社会機構にある」という現実認識をもちながらも、最終的には「女性よ、勇気をもって突き進め、努力せよ」という一貫して統合的なメッセージに集約されてゆく方向性も、石垣の言説の特徴として指摘できるだろう。

以上をもってひとまずのまとめとしたい。石垣の全体的な思想背景などを交えた総合的な分析は、今後の課題とする。加えて、もう一つ大きな問題がある。石垣の認識・提言とは裏腹に、現実には、高度成長期に専業主婦化が大きな流れとなった (居申 [2004])。しかし同時に高度成長期から、女性「就労の常態化」も進んでゆく (鹿野 [2004] 第3章第4節)。石垣の認識は、こうした現実の動きとどう「ずれて」いたのか、何を「先取り」していたのか、検討する必要がある。それも今後の課題とする。

## 注

1 以下、石垣綾子 (1903~1996) の略歴を記す。東京都生まれ。府立第一高女~自由学園高等科卒。大正デモクラシーの影響を受けて青春時代を過ごす。早稲田大学にも通う。1926年外交官夫人となった姉夫婦について渡米。その後ワシントンから単身ニューヨークに移り、1929年画家石垣栄太郎 (1893~1958) と結婚、ニューヨークのグリニッジ・ヴィレッジに住む。大恐慌、ニューディール、第二次大戦、マッカーシズムを体験。その中で日本の軍国主義・侵略戦争拡大に一貫して反対する活動に携わる (全米各地で講演活動を重ねる)。戦後1946年にはエリノア・ルーズベルト夫人提唱の「明日の世界を築くための国際婦人会議」に日本代表として参加。1951年マッカーシズムの赤狩りを逃れて夫と帰国。以後、戦後日本の女性たちに向け恋愛・結婚・職業など新しい生きかたを提示する評論をはじめ、多彩な評論活動を展開した。山形芸術学園学長も務めた。

なお、石垣綾子の論文・著作、ならびに石垣綾子に関する記事や論文などを、筆者がまとめたページがある。参照されたい。  
<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/gr/gsce/dw1/ishgkayk.htm>

2 「多かれ少なかれ、アメリカの働く独身女性は公然と男を追いかけている。私の友はそれをマン・ハントと云っていた。この言葉は凶悪な犯罪人が逃亡したとき、鉄砲をかついだ村人や警察隊が犬をつれて罪人を狩り出す意味だが、彼女はいくぶん自嘲の意味で男狩りと云う表現をした」(石垣 [1954:179])

3 女は「一号である妻でもなく、二号である妾でもなく、男から経済的な援助はいっさいうけない、零号という」(石垣 [1955b:197]) 立場。「男と対等な、女として愛し、愛される関係」(石垣 [1955b:198])

4 「アメリカの働く女性は、よほどの大物でなければ、妻子ある男にはちかよらない。……男狩りの目的は、生活力のゆたかな、自分を充分に養ってくれる夫のみ出すことだ。妻子ある中年男と、道草を喰うのは、馬鹿げたことだという算盤をはじいている」(石垣 [1954:180])、「働く女性はもつと真剣に、男狩りをやつたらいい。ずるい、弱虫の男と、火あそびをするよりも、真面目な男を狩り出すことだ」(石垣 [1954:181])

5 「仮に二十歳から二十九歳までの未婚女性の数を昭和二十五年の人口調査で見ると、二百九十三万九千人です。彼女たちの配偶者とし

で適当な年齢にあたる二十五歳から三十四歳の男性は百二十四万三千人ですから、二十歳から二十九歳までの女性の中で、百六十九万六千人の女性が結婚できない計算になります」(石垣 [1955c:130])。

「一九六五年(国勢調査)を例にとれば、三五～四九歳層(敗戦時に一五～二九歳)の女性は五歳上の四〇～五四歳層(敗戦時に二〇～三四歳)の男性と比べれば、実に二五五万人も多かった」(天野 [2005:201])。

なおこの世代の女性たちに関する各種データは、塩沢・島田 [1975] が参考になる。

6 「職場から閉め出される不安、人間性をうばわれた機械のような毎日、希望にもえるものもない明日の生活、こうした社会的な条件のもとでは、絶望的になり勝ちです。望みはかなえられず、不満な毎日をくりかえしていると、性の享楽に、わずかなはげ口をみ出して、せめてもの慰めとするようになります」(石垣 [1955b:212])。

7 「自分と同じ境遇にあり、同じ悩みをもつ女性が、こんなにも多くあるのだ、という事実を知り、話しあうことは、お互いの心をあたためてくれるものです。そのカベを一緒に突き破ろうとする勇気をあたえられます」(石垣 [1955c:134])。

そうした意味で、独身婦人連盟(1967～2002)の存在は注目に値する(天野 [2005:201-213]、塩沢・島田 [1975] 第3章)が、紙幅の関係上本稿では触れない。

8 ただし、石垣が前提としているのは「職場」での労働＝「職業労働」であり、そこからこぼれ落ちるものは何なのか、を見極め、問題化しておく必要はある。また、石垣が理想または理念とする「労働」とは、現代資本主義社会において実態化している「労働」とどれだけの振れ幅をもったものなのか、も問題である。本稿ではどちらの考察にも至らなかった。

## 文 献

天野正子 2005 『「つきあい」の戦後史 サークル・ネットワークの拓く地平』, 吉川弘文館

居神浩 2004 「家計構造からみた性別役割分業 経済の高度成長と日本型家族システムの確立」, 玉井金五・久本憲夫編『高度成長のなかの社会政策 日本における労働家族システムの誕生』, ミネルヴァ書房, pp.133-154

石垣綾子 1954 「職業婦人と婚期 もっと男狩りをやりなさい」, 『文藝春秋』32-2(1954-2):177-181

石垣綾子 1955a 「主婦という第二職業論」, 『婦人公論』40-2<454>(1955-2):48-53 → 上野千鶴子編 1982 『主婦論争を読む 全記録』, 勁草書房, pp.2-14

石垣綾子 1955b 『女は自由である』, 文藝春秋新社

石垣綾子 1955c 「結婚期からの解放」, 『婦人公論』40-5<457>(1955-5):129-134

鹿野政直 2004 『現代日本女性史 フェミニズムを軸として』, 有斐閣

塩沢美代子・島田とみ子 1975 『ひとり暮らしの戦後史 戦中世代の婦人たち』, 岩波新書

## Ayako Ishigaki on problems for women in marriage and work in 1950's

MURAKAMI Kiyoshi

Abstract:

The purpose of this study is to confirm Ayako Ishigaki's perceptions of the problems for women in marriage and work in 1950's Japan.

Ishigaki was a female critic who enlightened women's way of life in postwar Japan. Her representative article, "Shufu as the second occupation," preached that "Shufu"[housewives] should have an occupation outside the home.

In this study I pay attention to her descriptions of an ideal form of marriage and work for women. She pointed out the difficult situation of women in both marriage and work in the Japanese society of those days. Due to various causes, for example, a high female-to-male ratio, social customs, and limited economic opportunities, many women were forced to remain unmarried, and their living conditions were bad. In addition, she made clear that women's problems in marriage and work were related mutually. She concluded that the social system had to be changed, and she urged women to make strenuous efforts to work outside the home in order to realize social change.

Based on my analysis, Ishigaki's thinking, while keeping conscious of social stratification among women, emphasized a general message aimed at the advancement of women.

Key words : 1950's, Women, Marriage, Women's work, Ayako Ishigaki